



Maldives

モルディブ

谷村志穂

Shiho Tanimura

谷村志穂（たにむらしほ）

1962年札幌市生まれ。北海道大学農学部生物学科卒業。著書に『結婚しないかもしれない症候群』（主婦の友社）、『ナチュラル』（幻冬舎）、『十四歳のエンゲージ』（東京書籍）、『なんて遠い海』（新潮社）ほか多数。

モルディブ

1999年11月4日 初版第一刷発行

著 者 谷村志穂

発行人 新井俊也

発行所 スターツ出版株式会社

〒103-0015 東京都中央区日本橋箱崎町20-1

電話 販売部03-3639-4761 編集部03-3639-5469

印刷所 株式会社 広済堂

©Shiho Tanimura 1999 Printed Japan

●定価はカバーに表示してあります。

●乱丁・落丁はお取り替えいたします。

ISBN4-88381-004-6 C0095

モルディブ

谷村志穂

Shiho Tanimura

装幀／スタジオ・ギブ

表紙写真／浅井慎平

私は若さを失いかけていて、
モルディブに太陽の光を求めた

人間の生の盛りはいつ、訪れるのだろうか。私にとってはつい最近だったような気がするし、それは十代の頃にハリケーンのように通りすぎてしまったようにも感じられる。

いずれにしても、そんな日々の風景は、いつもクリアで鮮やかだった。心の目がかみ取っていた景色は、いつも晴れだった。

少しずつ曇り空が訪れるようになったのは、三十代を目前にした頃からで、何があるわけでもないのに、天候を好転させることができなくなっていった。自分の中のエネルギーが少しずつ消耗していくかのようにだった。

そんな私が一九九八年の一年間、モルデューに通い続けた理由ははっきりしていた。

私はもう若さを失いかけていて、その土地に反射する眩しいばかりの太陽のエネルギーに救いを求めていたのだ。

同時に恋もした。私の心が探し出した相手は、太陽の光がもっともよく似合う、褐色の肌をした、私よりずいぶん年下のまだ少年のような人だった。

恋といっても、ただ遠巻きに眺め続けただけだったようでもある。だが褐色の肌の人は、子供のような残酷さで私のことも通り抜けて行った。

私はたった一年の間に、十歳も老け込んだかに感じたが、それを癒してくれたのも、やは

りこの土地の力だった。モルディブへ行かなかったら、私は恋を失うこともなかったろうが、ただ静かに秋の落ち葉に埋もれるようにまいっていたのだと思う。何をすることもできずに立ち往生し、迷子のように惨めだったにちがいない。

だが眩しい太陽や、白砂や、ガラスのように光を反射する海面は、ややもすると鏡を見てはため息をつく私を強引に外へ誘い出してくれた。もっと、肌を焼くべきだと言っていたし、波の音に心を寄せるべきだと言っていたし、風を浴びるべきだとも囁いていた。

波に揺られてスノーケリングをし、焼けた肌にクリームを塗って、夜になると冷たいシェリー酒でも飲めば、どんな寂しい心にも睡眠は訪れるものだということにも気がついた。翌朝にはまた太陽が昇って、太陽が誘いだしてくれる。南のリズムは、少しずつすべてを癒してくれた。鏡を見るのをやめて、癖のついた髪をそのままゆるやかにまとめると、ごく自然な女性らしさも回復できる気がした。

長い髪を必死にブローして、毎晩ドレスに着替えて、何かを取り戻そうとしていた私は間違っていたのだということにも気付いた。白いTシャツにパレオでも巻いて、好きな香水をまとい、指に煙草でもくわえているほうがずっと私らしかった。

ダンスする若い子たちに交じって嫉妬の目を向けているよりも、部屋の窓辺で冷たい飲み

物を飲んでゐるほうが、心地よかった。人の嬌声の後ろから聞こえてくる波の音を確実につかみ取ることができた。

でもこれは、モルディブならではの柔らかさだった。

モルディブの島々と、それを取り巻く鮮やかな海が持つ力だった。モルディブとは不思議な土地だ。それは国でありながら、国家として迫ってくることもなく、島々の一つ一つも大洋の中の小さな浮き島ではない。インド洋に浮かぶ大環礁地帯。珊瑚が、砕けて、白い砂になる。砂が寄せ集まって、島々をつくる、それはまるで渚のようだ、と書く人もいる。だとしたなら、その島に集う人たちは、さしずめ渚に漂流した仲間ではない。

だが今その島々にも、危機が訪れているという。ここ数カ月、新聞を賑わせている地球の温暖化は、海面の水位を上昇させており、モルディブ諸島をはじめとした小国を海の底に沈ませる準備をしている。セイシェルやモリシヤスも、この危機に含まれている。

少しずつ元気を取り戻した私は、モルディブの海に感謝するつもりでこの本を書くことにした。書きながら、なおこの一年の様々な甘酸っぱいような心模様を思い出すこともあると思う。読者の方々には、海で目を赤くしたり、うつむいてしまったみつともない私のことも想像していただくことになるかもしれない。でもそんな一人の姿も、また海の風景なのかと

受けとめて欲しい。

モルディブの人々がとてもよく口にする言葉がある。

一つは、「バラール」。これは、素晴らしい、という意味。ドレスが素晴らしい日、月明かりがとても美しい日、海にイルカの大群が現れた日、幾度となく使われる。

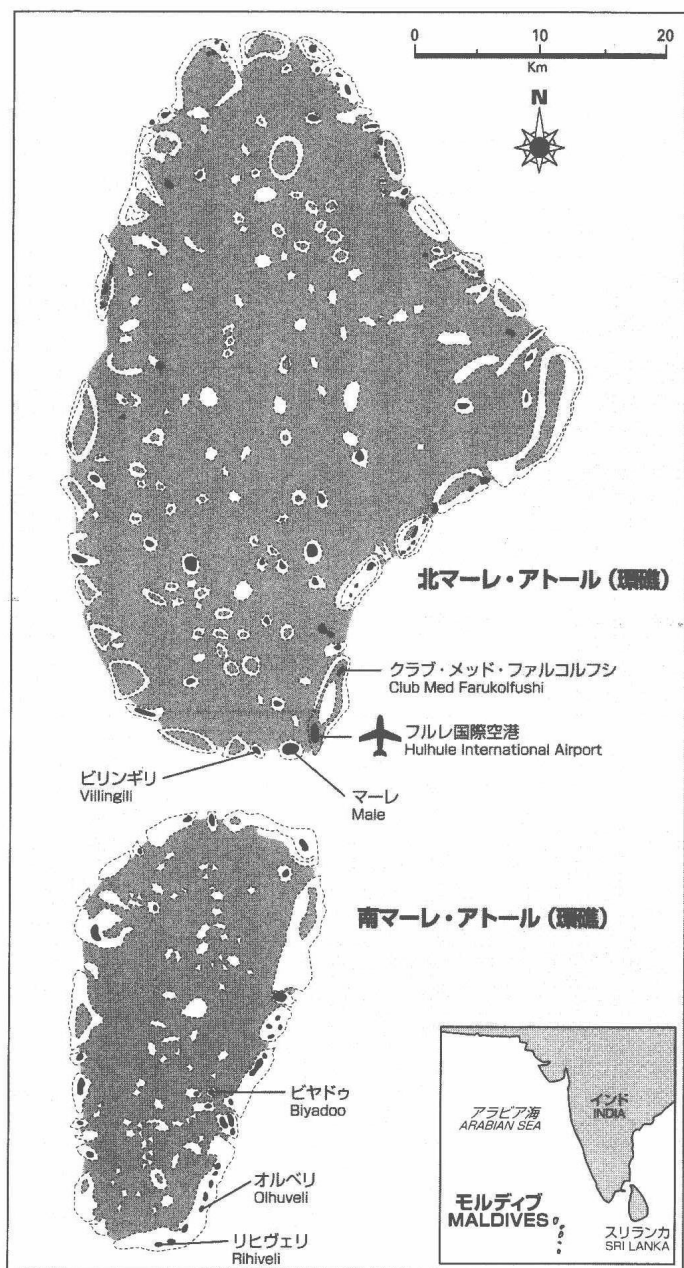
もう一つは、「シュークリア」だ。ありがとう、の意味。

本書『モルディブ』では、モルディブへのシュークリアを綴るつもりだ。

モルディブで過ごした最後の夜に、この本を書くことを決めた。すっかり陽の沈んだ海辺のバーで、足下まで伸びてくる月明かりの優しさを心に刻んでいると、その風景のすべてを包む柔らかい風に、シュークリアという言葉がずっと溶け込んでいくかのようにだった。

これは、私を立ち直らせた一年の海を綴った本である。

私を立ち直らせたくれた海からの言葉が、より多くの人に届くように。そして、この海から与えられた力を、今度は人々がこの海を守る力にバトンリレーできるように願っている。



第二章 ● 星々のきらめきと月の明かりの海を進むドリー

深夜到着便から、モルディブの旅は始まる 14

旅先に落ちていたもの 24

赤いランセルで出かける旅 37

人生の夏休み、潮の匂い 41

第二章 ● モルディブの不思議少年、イツセイとの会話

マーレの少年たち 58

イツセイの恋 66

雨の日の会話 74

パパのこと 82

第三章 ● 孤島から孤島への旅

モルディブに魅せられた人たち 98

さらに奥へ、オルベリ・アイランドとその周辺 106

ミスター・桜井との小さな冒険 112

必ず、さよならは訪れる 128

第四章 ● 私のはじめての、恐怖のダイビング

体験ダイビングでの立ち往生 146

私の怖れる未知の感覚 152

船長が暮らすドーニ 161

夕焼け初ダイブ 168

静かなるダイバーたち 178

第五章 ● 人々が信じる月と魔物の存在

新月の夜の黒魔術

182

生け贄のあった頃

188

デーモンのいたビリンギリ島

192

第六章 ● モルデイブは沈みたくない

海の中に沈む島々

210

珊瑚^{サンゴ}についての対話

213

世界中で報告される珊瑚^{サンゴ}の白化

225

好きだったあなたへ

241

あとがき

244

第1章

星々のきらめきと月の明かりの海を進むト一ニ

深夜到着便から、モルディブの旅は始まる

そんなに楽しい休暇を過ごしたのは、久しぶりのことだった。私のはじめてのモルディブ旅行は、たった七日間の出来事だったが、強烈な日焼けのあとと解放感をのこした。

それまで南の島へはずいぶん出かけていたつもりだったが、モルディブはそんなかつての旅先のどことも違って感じるように感じられた。

一つには、たとえば国家という形式が迫ってこないという点が大きい。

モルディブとは、大きなインド洋の一角を占める大環礁地帯そのものである。珊瑚礁が砕けて砂になり小さな白い島になり、そうした島々の千二百もの集合体が、その国の全体像なのだ。

人が住む島もあるし、丸ごと一つがリゾートのために用いられている島もある。島というより、それは渚なのだと表現する人もいる。何しろ島一つがそれぞれ歩いて二十分もせず一周できてしまうのだ。暖かな海の環礁に浮かぶ渚、まるで木の葉や小船のように海原を漂

泊しているかのような白い砂の小島たち。

シンガポール・エアラインでシンガポールを経由して、モルデイブの国際空港、フルレ島に到着するのは、深夜だ。他のエアラインでも、日本からの便はみな深夜の到着である。

そこからドーニというぼんぼん船のようなものに乗って、暗幕をかぶったかのような夜の海を進んでいく。それぞれの島に向かうドーニたちが、闇のなかで擦れ違う。柔らかな風が頬をなでていく。

深夜にフルレに着いて、アジア独特の熱気を感じたのも束の間、翌朝、島のロッジの部屋で目をさますと、もうまったく別の空気と時間が流れていた。

青の淡い色合いがつづく海に囲まれている。ココヤシが繁り、とても静かだ。ロッジの扉をあけると、海からの風が吹いてくる。裸足になって砂の上を歩きはじめると、陽射しがゆっくりと皮膚を包み込んでくる。

はじめはのんびりと過ごすつもりだった。フランス資本の「エクラブメッド」が所有する「ファルコルフシ」という島に滞在した。ファルコルフシは、モルデイブの首都マールエから最も近いゾート島の一つで、ドーニでも三十分ほどの場所に位置する。空港からもっとも近い